学校・保護者・関係機関の連携による支援について
【練馬区立 A 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、学習や運動が苦手で集団に合わせることにストレスを感じていた。徐々に教室に入ることができなくなり、別室への登校も難しい状況になった。保護者も登校を促すことに必死で、疲れ果てている状況であった。

具体的な取組

(1)SC 面談で助言

①本人と保護者を分けて SC 面談を行い専門的な助言を受けて、登校は控え家庭で過ごすことになった。

②担任は電話連絡で気持ちを聞き、本人が会えると言えば配布物を持って家庭訪問を行った。

(2)SSW とつなぐ

①保護者と本人の理解を得て、SSW につないだ。家庭訪問で関係を築き、定期的に面談を行った。

②次に本人を家から出るように促し、近隣区民館等で面談するようにした。信頼関係を深めることができた。

(3)別室登校に移行

①外出することに慣れ、だんだんと前向きになったため、SSW と学校で面談することになった。

②別室登校をすることができるようになった。

(4)進路選択に向けて

①定期的に担任と面談をして、進路について話をした。

②学校や適応指導教室との面談から目標ができた。

③進路決定に向けて自分を振り返ることができた。

成果

①加配教員により、関係諸機関と連絡調整ができた。

②保護者との相談活動に丁寧に時間をかけることができた。

③関係諸機関とつなげることで、保護者・本人の心の安定につながり、登校への気持ちや進路選択への意欲が増した。

課題

生徒の心の安定を図るためには保護者の心の安定も不可欠であるため、保護者と学校が同一歩調で子どもに接していく必要があるが、そのための共通理解が課題となっている。

別室登校について

【練馬区立Ｂ中学校の取組】

不登校生徒の状況

本校では、別室登校ができる生徒が３名程度いる状況である。対象生徒たちは、勉強は気になりつつも登校しぶりが続き、教室に入りづらい状況であるが、個々の状況等もあるため、継続した登校状態にはつながっていない。

具体的な取組

・別室登校ができそうな生徒に対して、個別に説明を行う。
・まずは、短時間でも学校に来ることを目標としている。
・欠席が続く生徒には「ＳＣと一緒に好きな給食を食べに来ないか」と学年の教員が電話で話しながら、コミュニケーションを取り続けていった。そのうち該当生徒から「この日の給食は食べたい」と電話がかかってくることもあった。ＳＣや教員と給食を食べ、そのまま別室で個別の課題等に取り組むこともあった。

・日によっては「今日は教室には入れないけれど、学校で勉強したいんです。」と、本人から電話がかかってくることがあり、担当者が急遽、別室での対応計画を立てる場合もある。ＳＣや心のふれあい相談員の勤務日であれば、相談活動を入れながら別室対応教員の手配をして、個別対応している。

・「勉強は気になる、成績も気になる、けれど教室には入りづらい」「定期考査は受験したい」という生徒の声を聞き、別室で定期考査受験を行った。
・別室受験のための監督の先生を校内全体で考え、生徒同士の距離を保ちながら取り組むことができた。

・不登校対応加配教員の企画・運営による、「不登校対策委員会」を週１回とし、時間割の中に組み込んで定期的に行っている。
・各学年１名の教員が出席し、一週間の不登校生徒の情報交換をする。校内で情報共有するので、生徒の別室登校の様子なども周知され、共通理解を図っている。
・ＳＣ、ＳＳＷも会議に参加している。

成果

・校内の居場所に関しては不登校対応加配担当中心に、なるべく学年の教員が関われるよう、職員全体で共通理解を図っている。居心地のよい環境づくりにより、該当生徒たちが短時間でも学校に来られる日が増えている。

課題

・該当生徒たちが継続して登校できる日は少ない。他の不登校生徒に対しても、登校すること自体のハードルを下げ、できる限り多くの生徒が学校に来られるようにしたい。

ほっとルーム（別室登校）を活用した支援について
【練馬区立Ｃ中学校の取組】

不登校生徒の状況

令和４年３月に不登校の状況にあった全ての生徒を対象として、進級判定に向けた校長面談の位置付けで保護者も含めた三者面談を行った。現状の聞き取りと次年度に向けた考えを確認するとともに、ほっとルーム（別室登校）の利用に向けた情報提供と意欲喚起を行った。

具体的な取組

ほっとルーム運用に向けた体制づくり

- 利用の手続きや利用上の留意点について改めて整理して校内で共有した。
- パーテーションを購入し、ほっとルームとして廃止予定のパソコン室の環境整備を始めた。
- 校務支援ソフトを活用し、不登校支援担当が生徒の利用日時を周知し、関係教職員が関わりやすい環境をつくった。

校内研修等を通じた継続的な取組

- 定期的に大学教授の指導助言を受けるとともに、全生徒の意識調査を踏まえた現状分析を行っている。
- 教職大学院生の協力の下、対象生徒の支援シートの作成を行い、個別の支援の在り方を検討していく。

事業予算を活用した支援員の配置

- 別室登校生徒を見守る支援員について、有償ボランティアの位置付けで配置して運用を開始した。
- 担任を中心とした働きかけを通じて利用を希望する生徒と保護者との面談を行った。
- 区が配備したタブレットパソコンの学習支援ソフトによる自学自習を基本とした利用を開始した。

別室登校の充実と未然防止の検討

- 広島県の不登校支援センター及び江田島市立大柿中学校、福生市立福生第二中学校の視察や、横浜市教育委員会の取組について聞き取りを行った。
- 新たな不登校を生まない学校の在り方を検討し、学校経営方針や教育課程の編成に反映する。

成果

- ほっとルームを利用した生徒は６人であった。そのうち、一人は 12 月から教室復帰をした。また、自宅から出られなかった一人は、一人で別室登校に来られるようになった。

課題

- ほっとルームの教室環境や運営について、更に改善が必要である。
- ほっとルームでオンラインを活用した授業の視聴ができる校内環境を整備することが必要である。

登校支援教室の取り組みについて
【練馬区立Ｄ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、不登校状態が長期化している生徒及び休み始めた生徒で、担任が必要性を認める生徒である。

具体的な取組

教室復帰が難しい不登校生徒に対し、校内に居場所を作る。不登校生徒が安心して登校し、学校への帰属意識をもちつつ、短い時間でも校内で過ごすことができるように、空き教室を活用して別室対応の環境整備を行い、個に応じた支援を行う。登室した日は、相談室登校とみなし、出席としている。

登室した生徒は、自分で選んだ学習課題やタブレットを持参し、50 分の範囲内で、自主学習をする。50 分間全ている必要はなく、やると決めた課題をやり終えたら下校してもよい。下校する際は、学年の教員に挨拶を行うか、常駐している不登校対応加配教科である英語科教員と挨拶してから、下校するようにしている。

常駐する教員は、授業は行わない（生徒が希望すればその限りではない）。最初に、対象生徒がその時間にやることを確認し、基本的に教員は見守る体制としている。個に応じた対応をするのが基本なので、不登校による運動不足を心配する生徒と、軽くストレッチなどを行うこともある。

担任と連携し、必要な課題を渡したり、必要な書類に記入させたり、掲示物や作品を作ったり、提出物を担任の代わりに受け取ったりしている。限定教科への部分的な教室復帰ができるようになった生徒の対する待機場所として別室を活用し、柔軟な利用も推奨している。

成果

学校には来られても教室には入れない生徒にとっての居場所になっており、継続して通えている生徒もいる。この２年間で、別室登校の意義が全教職員に浸透し、利用も増えてきた。

課題

火曜、木曜の２時間目と５時間目に開室しているため、授業カットなどの時間割変更の影響を受ける。定期的に通っている生徒には、その都度事前に連絡しておく必要がある。

不登校生徒の支援について

【練馬区立Ｅ中学校の取組】

不登校生徒の状況

・対象生徒は、教室には入れないが、別室登校ならできる。
・担任と約束をした放課後の時間なら登校できる。
・教室には入れないが、ビデオ会議「Google Meet」なら行事に参加できる。

具体的な取組

【学級担任による働きかけ】

・運動会のダンスに参加しようと担任が声かけし、放課後数人の友達と一緒に活動し、運動会のダンスに参加することができた。

【校内の支援委員会の活用】

・校内支援委員会で、きめ細かく一人一人の状況に応じて支援の仕方を検討している。ＳＳＷも支援委員会に参加し、専門的見地からの助言や外部機関との連携にも協力をしていただいて

【オンラインの活用】

・「Google Meet」を活用し、合唱コンクール等の学校行事の配信や各教科のオンライン授業に参加することで、学校とつながりをもつことができている。

【関係諸機関との連携】

・ＳＣや心のふれあい相談員、生活支援員、特別支援教室専門員などを活用して、校内で組織的に支援を行っている。また、ＳＳＷや子ども家庭支援センター、主任児童委員など公的な関係機関とも連携をし、状況に応じた対応を取れるようにしている。

成果

・運動会のダンスに参加できたことで体育・技家・総合の授業に参加できるようになった。また、オンライン授業に参加することで生活リズムが整い、基礎学力の定着が図れた。
・多方面からきめ細かく支援することにより、進路が決定でき、社会参画への道が拓かれた。

課題

・個別に対応する職員の数や場所の確保が難しい。また、放課後の対応など、職員の休憩時間や勤務時間を超えての対応となっている場合もある。

不登校対応加配教員を中心とした組織的な支援について
【練馬区立Ｆ中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学２年の生徒で、小学校のときからの不登校である。中学１年時の出席日数は 77 日だった。現在は、週に２日のチャレンジ（１日１時間の別室登校）を行い、見学ではあったが行事（体育祭・合唱コンクール）にも参加できた。

具体的な取組

不登校対策委員会を毎週行い、組織的な対応を行っている。担任等が行った電話連絡や家庭訪問の様子などを週ごとに不登校加配教員が集約して報告している。不登校加配教員を中心に学校内外の関係者と個々の生徒の現状分析と支援方針を検討している。検討した結果を全教職員で共有し、不登校状況の改善と予防のための支援に生かしている。

生徒が不安定になりやすい夏季休業明けに「おしゃべりウィーク」を設定し、全校生徒が話してみたい教職員と会話をする機会を作り、不登校傾向のある生徒や配慮を必要とする生徒の早期発見・早期対応に努めている。生徒からは「話しができてよかった。」「気持ちが楽になった。」との感想が出ている。

チャレンジ（１日１時間の別室登校）の取組を行っている。不登校生徒を対象に教室復帰や他機関につなげることを目的に不登校対応加配教員、特別支援教室専門員、学校生活支援員などが支援を行っている。不登校予防としても活用をしている。

スクールカウンセラーや心のふれあい相談員による教育相談、スクールソーシャルワーカーの家庭訪問、トライ(区の適応指導教室)への入室など外部人材・外部機関との連携を会議で検討し、積極的に進めている。

成果

不登校対応加配教員が中心なって、各学年・担任の支援状況を集約し、毎週の不登校対策員会で検討し組織的な対応がとられている。不登校生徒の数は横ばいであるが、「相談・指導等を受けていない生徒数」は前年度の６名から１名に減少している。

課題

集団になじめないという理由での不登校が多く、対応が難しい。不登校の解消までに時間がかかることが多い。